

・量ともに一つの理想を実現しており、「東
寺文書」の利用の将来にわたる基準となる
事は間違いない。

(B4判 図版篇三三二頁 カラー図
版六・点・モノクロ図版六〇四点 解説
編二七四頁 同朋舎出版 一九八六年
一〇月 四八〇〇〇円)

(伊藤俊一 京都大学大学院生)

川北 稔編

『「非労働時間」の生活史

——英国風ライフ・スタイル
の誕生——』

近年、対日貿易不均衡との関連で、日本人の「働き過ぎ」に対する批判が頻に高まりつつある。こうした批判の先鋒に立つ西欧諸国においても、余暇の成立とその社会的承認は工業化以降の経験にすぎず、またその展開は、現代的な「レジャー」という語のニュアンスでは包み切れぬ諸々の歴史的局面を有するものであった。本論集は英国における余暇活動の成立とその歴史的展開を論じた、イギリス都市生活史研究会による『路地裏の大英帝国』に次ぐ研究の成果である。以下、本書の順にしたがって紹

介をすすめることにしたい。

第一部『「非労働時間」の成立』には、工業化以前の「非労働時間」の在り方を論じた二論文が収められている。川島論文「層のなかの娯楽」では、工業化前の農村的社会における民衆娯楽の機能及びその変容とが、上位階層の民衆娯楽観との兼ねあいで論じられる。十七世紀のビュリタンの嫌悪と攻撃とを民衆の伝統的(ビュリタンの嫌の目にはカトリック的、あるいは異教的と映った)娯楽は生きのびた。それは、こうした娯楽・儀式が農村の生活リズム・労働と分かち難く結びつき、また農村社会の縦横の緊密な人間関係の確認と再生産という不可欠の機能を有していたがゆえである。したがって、十八・九世紀の、農村社会への市場原理の浸透と共同体の崩壊によって、こうした伝統的娯楽はその存在意義を喪失するに至る。これに迫り、うちをかけたのが、十九世紀版ビュリタニズムとも言うべき「合理的娯楽」の運動である。中流階級による、この新たな「都市の農村への戦争」を通じて、民衆の共同体的娯楽への固執は、個人の道徳的怠惰へと読みかえられ、同時に労働時間と「非労働時間」との分離が試

みられるのである。

以上の様に、前工業化社会においては、労働と娯楽は分かち難く結びつき、明確な形での「非労働時間」は成立していなかった。あまつさえ、工業化以前には民衆の娯楽活動そのものが批難の対象でもあった。しかしながら前工業化時代にも明確なかたちで「非労働時間」を有する人々が少数ながら存在した。川北論文「時は「カネ」か敵か 前工業化都市の『非労働時間』は支配階級の壮大な社交場としてのロンドンの在り様に言及している。すなわち、ジェントルマン階層こそが、工業化以前に明確な「非労働時間」を有していたのであり、それは強烈な自己顕示欲に支えられた社交という形で展開される。これが十六―十七世紀の交の「ロンドン社交季節」の成立であり、こうした街示的消費の慣習は上流市民へと広がって行く。しかし、上流市民にとってはコーヒーハウスが、下層民衆にとっては飲み屋がその社交場であった。その意味で工業化以前には、「非労働時間」にこそ階層ごとのアイデンティティ形成の契機があった。ロンドン等の都市と農村的地方との対照を更に際立たせたのは、十八世紀におけ

る娯楽の商品化・産業化の傾向である。これは地方が工業化以降に経験する事態の先取りでもあった。そして、このことが、他方で民衆娯楽公認の槓杆ともなる。工業化以降のミドル・クラスによる「合理的娯楽」という形での「上からの強制」は、見方をかえれば、この娯楽の公認を前提とした、あるべきアルタナティブの提示だったのである。そして、この「上からの強制」に対する「バブの文化」の抵抗力は、工業化とともに「階級意識」形成の場が生産の場へと移っていくにつれ弱まっていったとされる。

以上のような過程を経て、明確な形で労働時間から分離してきた「非労働時間」が十九世紀都市という舞台で、具体的に如何なる形で過ごされたのか。第二部「読む・たしなむ」では、大久保論文「日曜は『読書』の日 都市民衆の活字メディア」が都市民衆の活字文化の問題を、河村論文「ヴィクトリア時代の女性とレジャー」では女性のレジャーの在り方を検討している。大久保論文は、十九世紀中葉の都市労働者の支持を勝ち得た日曜新聞の成功を、すでに民衆むけの出版文化に存在していたセンセ

ーションナリズム、フィクション、さし絵の三要素を、ジャーナリズムという器で引き継いだ点に求める。換言すれば、都市民衆のために与えられた商業的活字文化を受け継いだ日曜新聞を通じて、商業的な大衆ジャーナリズムが都市の民衆文化の中に根づいていったとされる。

河村論文は、ミドル・クラスの女性のレジャー活動の在り様を、ヴィクトリア時代の支配的イデオロギーの一部としてのアイドル・ウーマン・バーフェクト・レディ像の浸透とその変化と結びつけて論じている。

前期ヴィクトリア時代の、アイドル・ウーマンという理念の影響力の強さは、読書や手芸等の「たしなみ」に主眼をおくジェントル・ウーマンの余暇活動の在り方に端的に示される。しかし、世紀末以降、この理想像が諸々の挑戦を受ける中で、女性のレジャー活動も、自転車、「合理服」、更にはティーショップに象徴される、戸外の健康的な活動へと広がりを見せるに至る。ここでは、レジャーの局面において、伝統的価値の枠を「徐々に、そして静かに」掘り崩していくミドル・クラス女性の主体的な姿勢が強調される。

第三部「身体を動かす スポーツと公園」

では、より動的な余暇活動の在り方が示される。村岡論文、「サッカーとラグビー・フットボール発達史」では、フットボールの発達が歴史的に跡づけられる。十九世紀以前のフットボールは、共同体社会の非日常的祝祭性に支えられた、空間的・時間的に無限定かつ粗暴な民衆娯楽であった。工業化の進行による共同体の崩壊によって、フットボールは十九世紀に、パブリック・スクールの中へとその舞台を移すに至る。フットボールの脱野蛮化とルール獲得過程とが、抬頭するブルジョアを伝統的ジェントルマン理念の内に包摂せんとするエリート教育制度の枠内で進められたことが、このスポーツに英国独特の社会的性格を付着させることになる。それは、十九世紀後半に、大衆レジャー産業の成立とともにフットボールが民衆のもとへ戻ってきた時点で、アマチュアリズムの根強い提唱として顕現するに至る。

山田論文「国民的スポーツ・クリケットの成立」では、従来比較的に等閑視されてきたこのスポーツが、十八世紀以降、パトロン庇護のもとで急速な発展を遂げたこ

と、それゆえに、プロとアマの対立が顕在化せず、「異階級混交の起こった数少ないスポーツのひとつ」たり得た事情が指摘されている。

米田論文「コークスの中の祝祭都市」は、伝統的『祝祭的娯楽パターン』と「明確な非労働時間」が設定されて以降の「合理的」娯楽のパターンとが対立をはらみながらも共存し、十九世紀中葉以降の都市の娯楽のパターンを形成していった様が描かれる。焦点を一地方都市プレストンに限定した結果、都市の変化しつつある娯楽活動の多様な側面が集約的に示されている。

第四部「大衆化したレジャー」では、伝統的娯楽の色あいを払拭し、いっそう商業化・大衆化した、今日の意味でのレジャーの展開が示される。井野瀬論文「歌は世につれ、世は歌につれ ロンドン子とミュージック・ホール」は、英国国民文化の一翼を担ったミュージック・ホールが、その十九世紀末の全盛期へと至る道筋を、供給する投資家・経営者の戦略・対応、受容者たるロンドン労働者の意識の変化、そして両者の媒介項たる芸人のプロフェッションナル化という三本の軸を中心に克明に跡づけて

いる。

角山論文「ギャンブル、映画、恋の冒険」では、両大戦間期にすでに始まりつつあった余暇社会への移行に、B・ロントリー、G・R・ラバースのケース・ヒストリーを手がかりに、個人の余暇活動という閉ざされた側面から光があてられている。対象は、ギャンブル、映画、更には「性の娯楽化」にまで至り、適宜、同時代の日本の事情との比較に論及される。

以上が本論集の要約である。以下紹介者の若干の感想を述べさせて頂きたい。本書の最大の特長は、タイトルとは裏腹に、余暇活動を単なる生産労働の残余としてではなく、英国人の文化・生活スタイルの質を規定した積極的な要素として提示した点にある。しかも、その際、レジャーを提供する側の事情よりもむしろそれを「消費」する側の事情に専ら光をあてている点にこの論集の功績があろう。とはいえ、伝統的娯楽が浸食されて以降、娯楽が商業化・大衆化された結果、余暇活動のイニシアチヴはそれを提供する「資本」の側へ移り、人々はそれを「消費」するにすぎぬ存在となってしまうたとの印象も同時に受けるのであ

る。しかし、これは本論集の責ではあるまい。余暇活動の「消費者」から「生産者」へという課題は現在の我々のものでもあるのだから。

(A四判 二八五頁 一九八七年三月
リポート 二四〇〇円)
佐久間 亮 京都大学大学院生